

自己肯定感と基礎学力の向上を3年間を通して図る

奈良県 天理市立北中学校

基礎学力がおぼつかない生徒の学力向上を図るには、学習意欲を高める働き掛けや、小学校段階でのつまずきの解消が重要になる。天理市立北中学校では、各学年に応じた取り組みを、3年間での生徒の成長を見通しながら展開している。

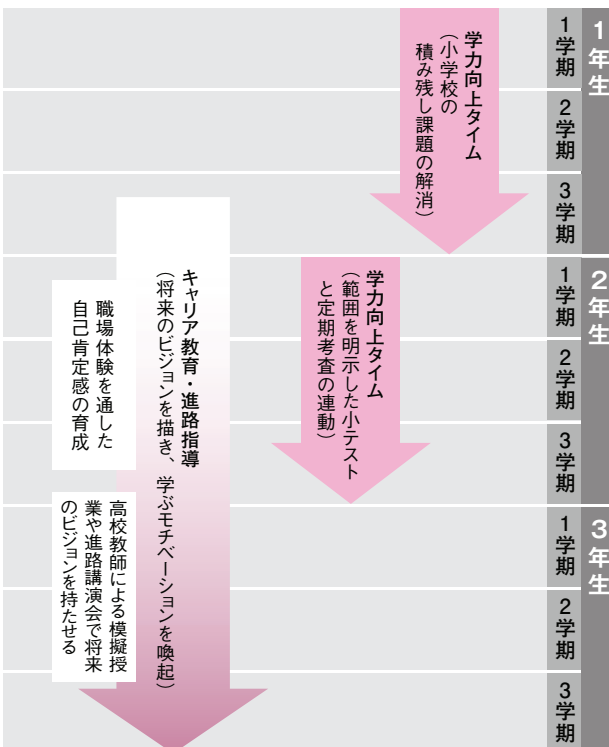
課題

- ・小学校段階での積み残しを抱えたまま入学してくる生徒の割合が高い
- ・学力だけでなく、自己肯定感の低さが学習意欲の低下につながっている

実践

- 3年間を通して、生徒の自己肯定感と学ぶ意欲を高める
 - ・生徒が成長を見せた時を見逃さずに褒める
 - ・2年生後半からキャリア教育を本格化。将来のビジョンを描かせることで自己肯定感を高める
- 学年ごとのねらいを明確にした「学力向上タイム」
 - ・週1時間、「学力向上タイム」を設け、1年生では小学校の積み残しの解消を図る
 - ・2年生の「学力向上タイム」では各教科の授業の復習プリントに取り組みせ、定期考査の問題はその中からも出題。「出来る」実感を味わわせる

3年間の指導の流れ



School Data

◎1958 (昭和33) 年開校。天理市の北東部に位置し、校区内には市の行政機関、商業地区のほとんどがある。部活動体験や出前授業をはじめとする小学校との連携、幼稚園や保育所との相互交流など、地域連携の取り組みも積極的に進める。



校長◎長友宏光先生 (2010年4月から)

生徒数◎353人、夜間学級46人

学級数◎15学級 (うち特別支援学級3)、

夜間学級4学級 (うち特別支援学級1)

所在地◎〒632-0011 奈良県天理市石上町777

TEL◎0743-65-0117

URL◎<http://ed.city.tenri.nara.jp/kita-jh/>

「学力保障」のために、移行期間の今できること

第1回

学力下位層を伸ばす3か年のストーリー

成功体験が少なく あきらめがちな生徒たち

基礎学力が身に付いていないままに入学してきた生徒は、単に学力が低いということだけが課題ではない。天理市立北中学校の橋口俊一校長（当時）は、同校の状況を踏まえつつ、次のように語る。

「成功体験が少なく、自尊心が低い生徒は、学習に取り组ませようとしても、『どうせ自分には無理』と最初からあきらめてしまう傾向があります。その点の改善を抜きに学向上は考えられません」

同校は、十数年前までいわゆる「荒れた学校」だった。奈良県下では長らく指導困難校と目されてきたため、毎年3割もの小学生が周辺の私立校や大学の付属校に進学するような状況が続いていた。

教師の粘り強い生徒指導や読書活動が実を結び、学校はようやく落ち着きを取り戻したが、まずは「自分もやれば出来る」という自信を持たせなければ、生徒は学びに向かうようにはならないと、橋口校長は考えた。

そこで、3年間を通して、自己肯定感と基礎学力の補強を図る活動を始めた。「自ら学ぼうとする心をはぐくむ」心にひびく生徒とのかかわりの中から「を教育目標に掲げ、生徒が授業中に小さなハードルを越えた瞬間を教師が見逃さず、その感動をすぐに生徒に

伝える指導を徹底したのである。研究主任の富山敦史先生は、次のように話す。

「どんなに小さなことでも、生徒が成長を見せた時にはとにかく褒めました。問題行動に対しては厳しく指導しますが、決して突き放したりせず、『これだけはしっかり守ろう。守れるようになったら、きつと君は伸びる』というメッセージを込めました。『自分は先生から見守られている』という安心感を持ち、『自分だって出来る』という自信を持つことが、学びに向かうベースとなるからです」

3年間を通して 自己肯定感と学ぶ意欲を育む

自信と安心感を得た生徒は、次第に学びに対して前向きになっていった。とはいえ、同校は他校に比べて学力上位層が薄い。「下位層対策」としてではなく、生徒集団全体として、学力の底上げが達成できるような指導プランを模索した。

まず始めたのが、2008年度から取り組んでいる週1時間の「学向上タイム」だ。3年間を通して実施するが、1年生では小学校の「積み残し」の解消に特化した取り組みを行っているのが特徴だ（P.10）。

「小学校段階の知識があやふやなままでは、中学校の学習内容を理解できません。また、しっかりと小学校段階の学習内容を理解させ

ることは、生徒の自信にもつながります」（富山先生）

小学校段階の積み残しを解消した上で行う2年生の学向上タイムでは、授業の復習を中心とした学習を行う。短期サイクルで知識の定着を図ることで、「分かる自信」を生徒に付けさせるのが狙いだ。そして、2年生の後半からは、高校教師を招いた模擬授業や職場体験学習を通じた学習意欲の喚起にも着手する（P.11）。

「家庭環境などの影響で、明るい将来の見通しが持ていない生徒もいます。そうした生徒たちの意識を未来に向けさせることで『学ぶ目的』を見つけてほしいと考えています」（橋口校長）

こうして同校では、3年間を通して、「学習意欲」「学力」「学ぶ目的」と三つの力を備えた生徒を育てようとしている。



天理市立北中学校

富山敦史 Tomiyama Atsushi

研究主任。2学年担当。国語科担当。「生徒一人ひとりの存在を、輝かせることが出来る教師でありたい」



天理市立北中学校校長

橋口俊一 Hashimoto Syunichi

「先生方が伸び伸びと働ける環境づくりを大切にしています」

*プロフィールは取材時(2010年3月)のものです

1

1年生の学力向上タイム▽小学校の学習内容を徹底復習

■小学校の積み残しの解消を図る

3年間の指導のスタートに当たるのが、週1時間の「学力向上タイム」を使った小学校での積み残しの解消だ。08年度に天理市教育委員会の「学力向上推進プラン」の指定校となったことに加え、新入生の基礎学力に危機感を持ったことが始めたきっかけだ。

1年生全員を対象として、国語と数学を中心に、担任と副担任がチーム・ティーチングで指導に当たる。基本的な計算問題や漢字の読み書きのプリント学習が中心だ。ただし、九九レベルでつまづいている生徒もいれば、小学校高学年までは授業を理解していた生徒、中学生になってから授業についてこられなくなった生徒など、学力の幅は広い。そこで、学習状況別に1級から20級までのプリントを用意。各級に合格すると「合格証」を渡

し、次の級に進めるという仕組みにした。生徒は自分のレベルに合った問題に取り組みつつ、問題をクリアした時には達成感を味わえるというわけだ。

また、単にプリントを渡すだけでなく、学力的に厳しい生徒に対しては、教師がしっかりと手を掛ける。

「彼らは教室の中で『ずっと放っておかれてきた』と感じています。そうした彼らを学習に向かわせるために、生徒と教師との関係性をつくることから着手しました。例えば、プリントにある20問のうち、たとえ2問しか正解していなくても、『2問できたやんか』と声を掛ける。そうした地道な声掛けの積み重ねによって、ようやく生徒はいすに座り、『もう少し頑張ってみようか』という気持ちになるのです」(橋口校長)

■下位層の生徒に別授業を実施

08年度半ばからは、小学校時代の積み残しが特に多く、中学校の授業についていくのが困難な生徒を対象に、保護者の同意を得た上で別授業を受けさせるようにした。国語、数学、英語の授業が行われている時に、別の教室で小学校までの学習内容を徹底的に復習させているのだ。指導はその時間が空き時間になっっている教師が担当する。

「加配によって教師数に比較的余裕が出来たため、別授業を行うことが出来るようになりました。小学校レベルの復習ですから、専門外の教科でも指導に当たれます。10年度からは教師数が減り、非常に厳しい状況ですが、下位層の生徒を学びに向かわせるためには、教師が熱心に声を掛け、手厚い指導を行うことが不可欠だと考えています」(富山先生)

2

2年生の学力向上タイム▽5教科の授業の復習に取り組み

■前週の授業の復習に取り組ませる

小学校段階の積み残しが解消されるタイミングを待ち、2年生の学力向上タイムでは各教科を復習する時間として活用する。09年度

は、月曜日の1時限目に設定した。

国・数・英・社・理の教師がそれぞれ、前週の授業内容を確認するための問題(図)を作成し、それらを1枚のプリントにまとめる。

50分間のうち、前半は生徒が問題に取り組み、後半では学級担任と副担任が指導しながら答え合わせを行う。教師が生徒に問題の解き方や考え方を教える時間となっている。

学力下位層を伸ばす3か年のストーリー

3

職場体験学習と模擬授業で学ぶ目的を見付ける

担任・副担任は担当教科以外の教科についても解き方や学び方を教えなくてはならないが、「基礎基本レベルであるため、担当外でも指導は可能」（富山先生）だ。

■定期考査をプリントから出題

ポイントは、定期考査の問題が学力向上タイムで使用する確認プリントからも出題されることだ。下位層の生徒でも、確認プリントに繰り返し取り組んでいけば、定期考査で確実に得点できる。生徒の学習意欲を高めると共に、確認プリントに繰り返し取り組ませることによって、「これだけは習得しておいてほしい」というレベルの基礎学力も身に付くというわけだ。

■生徒に「未来」を見せ、学ぶ理由を見付けさせる

生徒の学習意欲を高めるには、「学ぶ目的」を持たせることも重要だ。同校では、2年次から職場体験学習や高校教師による模擬授業などにも力を注ぐ。

「家庭環境が複雑な生徒の中には、中学卒業後の生き方そのものに明るい展望が描けないケースもあります。生徒に『未来』を見せることによって、学ぶ目的を明確にさせたいと考えています」（富山先生）

職場体験学習は、2年生に1週間に渡って行う。働く喜び、仕事の大変さを肌で感じさ

「3年生では、毎月、学力テストを実施します。最初は応用問題に太刀打ちできず、低い点数しか取れない生徒が大勢います。でも、生徒には大丈夫と話しています。『君たちはしっかり基礎が出来ているのだから、これから努力を続けていけば必ず伸びるよ』と伝えています。3年生で高校入試に対応できる学力を付けさせるために、2年生までに基礎学力

せるためには、その程度の期間は必要だと考えるからだ。事業所への協力依頼時には、「体験に訪れる生徒は、今、こんな壁に当たっています」というように、個々の生徒の状況に直に伝えていく。受け入れ側は学校の思いに伝えてくれ、生徒にそれなりに責任ある仕事を与え、うまく出来た時には思いっきり褒めるといったことをしてくれるという。また、この職種に就くためには何が大切か、どのような学習が必要かといったことも話してもらおう。こうした体験が、生徒にとって自信となり、未来に対する目標を持つきっかけ

図 「学力向上タイム」のプリント／数学の例

2年学力向上タイム 数学 No. 20
()組()番 名前()

1 右の図は、 $\square ABCD$ である。次の問に答えなさい。
① 線分CEの長さを求めなさい。
② $\angle CDE$ の大きさを求めなさい。

2 右の図の四角形ABCDで、どんな条件が加わると四角形ABCDは平行四辺形になるか。下の①～④の中から2つ選び、番号で答えなさい。
① $AB=DC$, $AD\parallel BC$
② $AO=CO$, $BO=DO$
③ $AD=BC$, $AD\parallel BC$
④ $AD=BC$, $AB\parallel DC$

3 次の①～④の中から、長方形、ひし形、正方形の性質にあてはまるものを、それぞれすべて選び、番号で答えなさい。
① 4つの角がすべて等しい
② 4つの辺がすべて等しい
③ 対角線の長さが等しい
④ 対角線が垂直に交わる

長方形	
ひし形	
正方形	

を確実に定着させるといのが、本校の取り組みの基本的な考え方です」（富山先生）

となつている。

■第1志望の高校・学科の模擬授業を受ける

2年生の秋には、志望者が多い高校の教師を中学校に招き、模擬授業を行う。生徒にアンケートを取り、必ず第1志望の学科の授業を受けさせている。クラスによって受講者数に差が出るが、その学科に本当に興味がある生徒だけが受けているため、高校教師も熱を帯びた授業をしてくれるという利点がある。

この模擬授業をきっかけに「高校での学び」に対するイメージが鮮明になり、進路についての目標が出来る生徒は多いという。